

卯の花の里だより

春雪散らふ

井上敏一
(佐佐木信綱記念館)

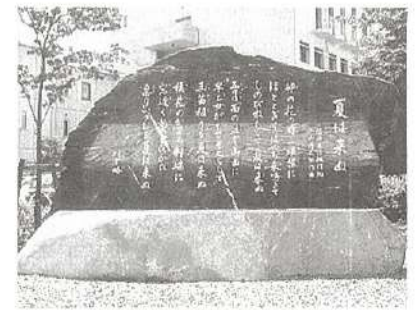
記念館のまどから庭を眺めていると、枝ばかりだったうのはなも小さな芽をつけて、春が来るのをじっと待っているかのように見えます。

私は平成六年五月より勤務して六年、その間たくさんの方々に会い、いろんなことを勉強しました。新しいパンフレットと絵はがきの作成は、私にとって貴重な経験であったし、何物にも代えがたい宝物となりました。また、短歌を詠まれる方々、文学に関心のある方々、あるいは東海道を歩いている方々など、たくさんの方達と出会い、いろんなことを語り合いました。

中でも心に残る思い出の一つに、「夏は来ぬ」の歌碑を建立したことであります。それは今は故人とされた塩川弥一郎氏(医師)から、市制五十五周年に因んで歌碑を寄贈したいと申し出があったからです。建立するに当たって場所をどこにするか。どんな形のものにするかなどいくつもの課題がありました。唱歌として国民に親しまれた歌ですから、市内の中心地にもっていきたいということで、関係者のご協力をいただき、市立図書館の北側に建立するこ

とになりました。二月下旬、雪のちらつく寒い日でしたが、村田邦夫先生を伴って石材店へ行きました。その折、先生は次のような歌を詠まれました。

くを
やがて師の
歌刻むべき
大き青き
石のはだへに
春雪
散らふ



市立図書館前に建つ歌碑

平成九年六月一日、市長をはじめ市の関係者を迎えて除幕式が行なわれました。真白な布が掛けられた歌碑の前に塩川氏のご家族の方々が立たれました。塩川氏のお孫さんの弾かれるバイオリンの音に合わせて「夏は来ぬ」が合唱される中、白布が除かれ大き青き石が太陽の光に燦然と輝き現れました。この時の塩川氏の心の感動は如何なものであったでしょうか。私も忘れえぬよき思い出を得ることができました。この想いを胸に秘めながらベンを置きます。村田邦夫先生「歌人・信綱の秘書。神奈川県在住。



『寸錦帖』をめぐって

特別展記念講演から

村田 邦夫



講演中の村田先生

「寸錦帖」とは何か。寸とは、一寸の虫にも五分の魂」という言葉があるように、小さいことを言います。錦は、「故郷に錦を飾る」と使われるように、良いもの、貴重で高価なもの、つまり、「寸錦帖」とは、小さいけれども非常に貴重なものといった意味です。

では、その「寸錦帖」がどうして当資料館に収められるようになったのか。先に山下教育長はこのことは、村田さんの全面的な御尽力によると言われましたが、実は全然タッチしていません。

昭和六十年ごろでしょうか、当時の神尾教育長が鎌倉の

目次	
寸錦帖をめぐって	村田 邦夫
展示室だより	辻 正
信綱一首	村田 邦夫
卯の花の里だより	井上 敏一

佐々木家を訪ねられ、それ以前にあった教育委員会の不手際を「部下の責任は私の責任である」といって直接お詫びの御挨拶に來られた。そのとき佐々木家は、鈴鹿市の誠意に素直に感動され、「これを鈴鹿市へお土産としてさし上げよう」ということになって、四冊の特別製アルバムに収められた葉書集、すなわち「寸錦帖」をその場で神尾教育長に手渡されたのです。たまたま私はその場に同席していたのですがこのことについては全く蚊帳の外で、傍観していただけです。

家宝ともいえるべきものを何の条件もつけずに贈られた佐々木は実に見事というか立派なものです。それとともに、あのときの神尾先生のお姿は今も忘れることはできません。次に、百点ほどある葉書、断簡類の中から数点を選びお話しすることにいたします。

先ず尾崎紅葉。一枚は「あ、降つたる雪哉 一寸御見舞申上候 卅一日 夕」の絵はがきです。二羽の鶴が印刷されています。これは、皆さんも御存知のように謡曲「鉢の木」の一節です。信綱先生は「村田さん、古典というも

のはこう詠むものですよ。一寸は、「チヨト」お見舞い申し上げ候でないと、調べが合わなくなりすから」とおっしゃったが、私は反対だ。あの江戸っ子のチャキチャキの紅葉がそう言ったはずがない。やつぱり「チヨット」でしょう。私は先生にそう申し上げたい。

もう一枚は「スッポンスープ一合 生玉子四 桶うどん少々 右中食の後 大もたれにもたれの函 明日御西遊との御事新聞に見えたり 真乎 六月十九日」と書かれた、右半分に紅葉の寝そべった写真が印刷されています。

いかにも自分の病気の状態を茶化し、こんなに榮養をとっても一向に良くならない。そういう葉書をよこすほど紅葉は一二年後輩の信綱を可愛がっていた。信綱も「紅葉さん、紅葉さん」と親しみを込め尊敬していた。歳は二つぐらいいし違わないのに、紅葉には人間的なそんな貫禄があったらしい。スッポンスープ一合、生卵を四個食べても榮養がつかない。紅葉の病氣は癌だったのです。はがきの消印は明治三十六年六月十九日のスタンプです。ということは、その年の十月三十日、三十六歳の若さで紅葉は没していますから死ぬ四か月ほど前の手紙なんですね。

自分の死をみつめながら後輩をもちたて、やつと信綱もここまでになった。しかし、自分の病氣は良くならない。新聞に動静までが掲載されるほどになった後輩への思いはどのような感慨であつたらうか。そんな時に出したものは無いでしょうか。

これは余談ですが俳人紅葉の有名な辞世の句に「死なば秋露のひぬ間ぞ面白き」、まさに江戸前の俳句です。朝露の乾かないそんな短い間、俺も三十代半ばで死んでいくんだが、これもおもしろい。やり残したことはたくさんあるけれど……

次に御覧になると、びつくりするほど絵かきさんのものがございます。富岡鉄斎、寺崎広業、川合玉堂、小杉放庵、近代日本画を完成させた安田朝彦、前田青邨など。

佐佐木信綱全集の表紙の絵は安田朝彦です。早く亡くなられた幸綱先生のお父さんの治綱先生の「秋を聴く」というたつた一冊の歌集は、前田青邨の装丁ですね。これらの人たちは信綱先生を良い先輩として、絵画のもつ文学性というのを、いい意味で取り入れるときに信綱の忠言を聞いております。

例えば、玉堂が塩原から出した絵はがきは、紅葉を実に見事な筆致で描いている。「こころあたりは山家ゆえ、紅葉のあるのに雪が降り申候 拝具」は浄瑠璃「箱根靈驗 璧仇討」の勝五郎の妻、初花のせりふでしょう。また、放庵の「謹賀新年、沼津の宿にて」だけの葉書。私は最近、芝居だと思ふようになりました。馬子が馬を引つ張っている絵を描いている。これも浄瑠璃「伊賀越え道中双六」沼津の段でしょう。信綱はこの人たちに実に親切に新しい日本画の代表者として古典を月一回講義した。これを信綱もずいぶん楽しみにしていたようです。

最後に、日本がある意味ではいちばん世界の強国として盛んであつた時代、万葉集の各大学の一番偉い方々が集つて英訳萬葉集を作つた。その生の原稿が、ほぼ完全なかたちで資料館に収まっている。これに参加した市河三喜を中心とした英語の原稿があればいいのですが。

ここにあるのは、英訳萬葉集が完成した記念パーティーに使われたメニューに九名の学者が寄せ書きしたものです。時は昭和十四年四月七日、春爛漫の候、場所は東京会館参加したのは、滝精一、武田祐吉、市河三喜、広辞苑の新村出、歴史学の辻善之助、言語学の橋本進吉、鈴木虎雄、山田孝雄、そして佐佐木信綱。

その宴会の献立は、豊御酒(シヤンパン)、薯蕷物(ポタージュ)、焼魚(フライ)、牛炙(ビーフステーキ)、春菜(サラダ)、氷菓(アイスクリーム)、阿倍橘(フルーツ)。テーブルには、ムードを出した奈良の馬酔木の花が飾られました。

今日御出席のご婦人方、明日は日曜日です。これを参考

信綱一首・14

昔男ありけり

ひむがしの

五条わたりの

おぼろ夜の月

(銀の鞭)

物語ぶり」と題して、主に京都を背景に王朝文学から取材した浪漫的な一連の第一首。伊勢物語第四話、「むかし、東の五条に大后の宮おはしましける、西の対に住む人ありけり」による。昔、在原業平も仰いだ春の夜の「おもしろかりける」月光が、今、作者をいつか王朝人と一つに重ねてしまう。この話の結びである「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもの身にして」の絶唱が、この一首の背景にあることは言うまでもない。

(村田 邦夫)

にされ万葉集の昼食を作られてはいかがでしょうか。(抄) ☆お断わりとおわび

本稿は、昨年十一月二十七日、特別展において村田邦夫先生が約一時間半にわたり講演された内容の一部です。今回、先生の御都合で原稿が間に合わず、やむなく無断で掲載いたしました。なお、連載の「信綱一首」も同じ理由で、「佐佐木信綱先生とふるさと鈴鹿」から採りました。ともに、お断わりとおわび申し上げます。(文責 辻)

展示室だより 四冊のアルバムが佐々木家から当市に寄贈された経緯は、お分りいただけだと思う。私が資料館に関わることになり、その初仕事で、取められていた百点ほどの書類類を読むことであつた。日本の近代を彩つた巨人達の個性ゆたかなナマの筆跡を目の前にしたときの感動を今も鮮やかに思い出す。そして、そのアルバムが「寸錦帖」と名付けられたものだを知つたのは一年もしてからだつた。

(鈴鹿市教育委員会 辻 正)